

「第49回 ローザンヌ国際バレエコンクール」のご紹介

校長 中村 成希

若手バレエダンサーの登竜門「[第49回 ローザンヌ国際バレエコンクール](#)」の様子が、読売新聞（令和3年3月11日朝刊）に載っておりましたのでご紹介します。八洲学園大学国際高等学校の淵山隼平くんが5位入賞、中島林太郎くんがセミファイナリストとなりました。【提供：読売新聞】（※本学生徒の入賞は、アクリ瑠嘉くん、伊藤充くん、山元耕陽くん、住山美桜さんに続く快挙となります。）

スイスで2月6日（現地時間）に決選が行われた第49回ローザンヌ国際バレエコンクール。コロナ禍のため、ビデオ審査で入賞者を決定するという初の試みだった。プロを目指す若手ダンサーにとって憧れのコンクールであり、出場者たちが現地へ行けなかったことは残念だったが、メリットもあったようだ。

ビデオはインターネットで公開され、審査員だけでなく、世界中のバレエ学校やバレエ関係者、一般の人々も見られた。審査委員長のリチャード・ウェーロックは、「生身の姿を見ることが出来ないから簡単ではなかったが、参加者一人一人について、審査員同士で細かい点まで話し合いながら審査できた」と話す。

5位に入賞した淵山隼平(18) Ⅱ

ローザンヌ国際バレエ

写真Ⅱは、ビデオ収録の際、あまり緊張せずに臨めたため、「本当の自分を出せた」と振り返る。長い手足を生かした伸びやかな踊りで、ウェーロックも「オーラウンダーで、非常に見込みがある」とたたえた。

淵山には計四つのバレエ団やバ



初のビデオ審査細かい点まで

レエ学校から入団や留学のオファーが来たという。淵山を指導してきた「アクリ・堀本バレエアカデミー」（埼玉県）の堀本美和は、「審査員のアドバイスが後日、事務局からメールで送られてくるなど、きめ細かいフォローがあった。この状況下でもたくさんさんのオファーがあり、やはり特別なコンクールだと思った」と話す。同じ教室

から出場した中島林太郎(15)は決選に進めなかったが、9校から留学の打診があったという。

一方、舞踊ライターの森菜穂美は、「通常であれば現地で世界一流の教師や振付家の指導を約1週間受け、その成長具合も評価の対象となる。それがなかった今回は既にプロとして通用しそうな完成

度の高い出場者が入賞した印象だ」と語る。1位のポルトガルのアントニオ・カサリーニョは抜群のテクニックで、画面越しでも鮮烈なオーラを放った。

ウェーロックは強調する。「戦災や自然災害、パンデミックがあったときもバレエはなくなりません。乗り越えてきた。大切なのは決して諦めないこと。森は今大会を「形を変えてでも開催にこぎ着け、才能ある受賞者を選ぶことができた。芸術は決して滅びないという強いメッセージを発することに成功した」と評価する。

世界中でバレエ公演が次々と中止となる中、希望の光となった今回の「ローザンヌ」とはいえ、来年は現地で通常通り開催されることを祈りたい。

（小間井藍子）



【画像：淵山隼平くん】



【画像：中島林太郎くん】